

道博協ニュース

第41号

発行 平成5年2月15日
発行所 北海道博物館協会
事務局 札幌市厚別区厚別町小野幌
北海道開拓記念館内
電話 011-898-0456
FAX 011-898-2657

博物館活動交流推進会議・

全道ブロック館長等会議終了する

昨年の十一月十、十一日の両日にかけて、函館市の五稜郭タワーにおいて「平成四年度博物館活動交流推進会議・全道ブロック館長等会議」が開催された。

この会議は、北海道開拓記念館が主催するもので、北海道博物館協会、道南ブロック博物館連絡協議会、市立函館博物館の三者が共催し、北海道教育委員会の後援のもとで開催された。交流推進会議・



全道ブロック館長等会議としては、平成二年十一月の開催以来、三回目の会議である。交流推進会議の第一日目は午後一時より、型通りの北海道開拓記念館渡邊左武郎館長の主催者挨拶、地元市立函館博物館木村繁館長の歓迎挨拶でスタートした。

次いで特別講演に入った。講師は、かつて市立函館博物館において学芸員として活躍したことのある北海道大学文学部教授の吉崎昌一氏で、演題は「考古学への展望と博物館の役割」で、内容は、考古学界の最新の情報を中心に、古人骨の組織タンパク質（コラーゲン）からその人の生前の食生活を復元する方法、旧石器時代人からアイヌ人までの日本列島における人類進化の様子、そして、氏が目下一番力を注いで研究している植物種子の問題から縄文時代における稲作農耕を取り上げ、

全国各地から発見された新事実を興味深く紹介された。最後に博物館の役割に触れられ、博物館は基本資料の収集が第一の仕事である」と結ばれた。なお質疑応答の後、出席者の一人から、内容が非常に良かった。是非事務局で要旨を纏められ印刷物にして配布して欲しいとの要望が出されていた。

研究協議では「博物館施設のネットワークの現状と課題」をテーマに市立函館博物館、木村繁館長と、北海道開拓記念館、関秀志学芸部長の二人を提言者に行われた。木村館長は、博物館の社会的役割、ネットワークの必要性などを説き、現在事務局を担当している「道南ブロック博物館施設等連絡協議会」の発足準備から現状、さらに将来展望について話された。また、関学芸部長は、ネットワークの内容容について組織と研修、情報交換、展示と普及、調査研究など、主として実務面から具体的にその事例を紹介した。

第二日目は、前日の交流会の余韻まだ醒めやらぬまま、約半数の参加者が出席して市立函館博物館五稜郭分館と北海道立函館美術館の施設見学会が行われた。

市立函館博物館五稜郭分館では、保科学芸員より、武田斐三郎と五稜郭城、五稜郭戦争と土方歳三、高松凌雲などについて遺品を見ながら適切かつ示唆に富んだ解説を受けた。

北海道立函館近代美術館では、特別展「一九二〇年代・哀愁のバリーバスキンとエコールドバリ展」が開催されており、五十嵐学芸員よりレクチャールームでスライドを使用した事前解説を受け、三々五々展示室に入った。

今回の交流推進会議は、特別講演も良かったが、久しぶりの施設見学会が印象に残った。その理由は、見慣れた施設ではあったが、それぞれ解説してくれた学芸員が非常によく勉強し、展示やその企画に精通していたからに他ならない。

（苫小牧市博物館館長・北海道博物館協会理事 佐藤一夫）

北海道開拓の村が十周年を迎える

よもや私が開拓の村で働くことになると思ってもみなかった。だから、開拓記念館の退職を間近に控えた十二月のある日、開拓の村へ行く気はないかと内々の打診があったとき、大げさでなく寝耳に水と驚いたものだった。

あれからもう九年も経っているのだから、もうすっかり他人の子になっている。今更私が親ですといえる義理ではない。もし、自分の思惑と違って育っていたら直したいと思ひ、育ての親との確執が起つて子どももつらいだろう。このままそつとしておいたほうがあの子のためになる。種々迷つて、結局我欲に負けて、みつともなくも開拓の村に来てしまった。

来てみる案の定、自分の責任だとはつきりわかる欠陥がやたらに目について、いたたまれない。育ての親が一生懸命にやってくださっているだけに、つらいものがある。

今年十二月までに、二十万九千人余の入村者を迎えた。三百万人目は平成三年十月に到達した。来村者には概ね好評のようであるが、理事者としては、繰返し来られる人も増えている。ただ、運営にあたっては、財団開拓の村が一番頭を悩ましているのは、やはり、入村者が伸び悩んでいることだろう。学芸員の私としては、こんなものだろうと思

っているが、理事者としては、成果として毎日表れ、他からの評価の目安になる入村者数が気になるところで、その懸念は十分理解できる。展示棟と内部展示は、周知のように地味なもので、たぶん一度見たらもういいと思われよう。その後の誘客の要素は、あたりまえだが、いろいろな事業の内容で決まる。

開拓の村へ来て真つ先に聴いたのは、雨天時対策と催事の場所の不足であった。今年屋外ステージで仮設の小屋をかけ村芝居と民謡大会を行なったが、途中雨が降つ

てきて観客席は傘の花。芝居を途中で中止して、場所を管理棟の小ホールに移した。舞台もないし、観客席も折り畳み椅子を五十脚並べて満杯。蒸し暑いやら狭苦しいや

ら。出入りが激しくさわがしかったが、それでもなんとか急場を乗り越えることができたのは、役者さん達の大熱演に助けられたことだった。

管理棟は、旧札幌停車場を模したもので、見かけは結構一般に受けて、今や開拓の村のシンボルになってはいるが、機能的には最悪で、苦心の部屋割りも実際には誠に使い勝手が悪い。

もともと、駅の平面図に野外施設の機能をはめこんだので、不合理なところが出てくる。券売り、もぎり、用便、休憩、雨天時の避難、昼食、救急などの客さばきの機能。オリエンテーション、学習指導、面談、特別展示等、普及活動の機能などでは、ずいぶん障害を生んでいる。

そのたびに、こんな建物を建てた奴は誰だといわれているような気がして身が細る。また、開拓の村に息吹を与えるのに欠かせない、桶、竹の職人の演示は、旧武井商店酒造部の帳場を借りて行なっているが、これとて、それぞれの建物が復元されていけば、問題はなかった。

老人を、暖のない吹きさらしの、便所もない所で働かせているのは又、見るに忍びない。展示棟をもつと活用したい、例えば、そば屋でそばを打つて食べさせたい。飯場で合宿を体験させたい。松橋家で昔のお正月を体験させたいなどいろいろあるが、その時、火気や水、便所の使用ができる建物となると数が少ない。

本来、その家で実際に生活ができるように作るという原則が果たされていないのである。それだけでなくも今日のように、テーマパークと称する野外施設が激増すると、開拓の村のような地味な施設は経営に苦勞をする。不特定多数の観客に何度

も来てもらうためには、なんらかの意味で観客が心地よくなければならぬが、雨の日の対応とか、駐車場が狭い等の、接客の基本的な部分で不足していればそこから修正していかなければならないので、十数年前の読みの浅さが悔やま

れてならない。遅れてきた親は、胃が痛むだけでよいが、それより苦勞しているのは実際に活動している若い職員達である。

行催事を担当しているのは事業課で学芸員二名と事務職一名と行政職の課長計四名でこの不備な施設を使い、年間六十件を超える行催事と出版宣伝の業務の一切をこなしている。もちろん、土・日曜も祝日も休めない。

大体、これだけの施設に学芸員が二名というのは解せない。諸外国の視察者も異口同音に驚いている。

実は、計画段階から開拓の村が博物館かそうでないかで意見が割れており、結果的には私が負けて、博物館的施設で妥協した経緯があり、それ

に苦勞をする。不特定多数の観客に何度

も来てもらうためには、なんらかの意味で観客が心地よくなければならぬが、雨の日の対応とか、駐車場が狭い等の、接客の基本的な部分で不足していればそこから修正していかなければならないので、十数年前の読みの浅さが悔やま

が今日まで尾をひいている。

幸い、開村時に採用された一人の若い学芸員が優秀で、困難な状況のなかで着実に博物館の道を歩んでくれた。その後を継いだ学芸員もまた必死になって博物館への道を踏襲してくれたから、今日曲がりなりにでも博物館と標榜してあまり恥ずかしくない営みを維持していられる。

ただただ感謝しなければならぬ。

開拓の村にご厄介になってリーフレットを作り直したとき、恐る恐る、「野外博物館と入れたのですが」と申し出た私に、現在の理事者は何を聞くのかと怪訝な顔をして、「何か差し支えありませんか」と逆に問われた。

私はたちまち今浦島の気分になってしまい、自分の誤解を恥じた。

これなら、村における学芸員の数の劣勢を嘆くことはない。要は全員が学芸員の資質を持って事に当たればよいわけで、資格がどうのこうの問題ではない。

こうした、理事者の認識の

変化は、あの学芸員たちの献身的な活動によるものと思うが、加えて、来村者の野外博物館に対する認識の変化と、評価の高まりによるもので、両者つまり、学芸員と来村者との十年間の対話が作り上げた結果ではないかとも考える。

何に笑うかや笑い方が人間の尺度になると同様に、何を面白いと感じるかが、人間の尺度になり、人の興味の質も変化する可能性があり、そこに教育の意義が存在する。

私たちは、毎日の営みを通じて徐々に博物館の面白さを面白さとして感じとれる人間を増やしていかなければならない。それが、博物館の教育というものだ。

開拓の村では昨年辺りから小中学校の利用に際して、極力オリエンテーションを行なうようにしている。

事前視察の先生方にも会うようにして、開拓の村では何が学習できるか、何を学習してもらいたいかな等話し合う。児童生徒の学習時には、で

きるだけ学芸員がついて学習

の手助けをするようにはしているが、何しろ人手不足である、多い日には三十校以上も入るから、ほとんどオリエンテーションで終わっている。それでも、効果は確実に上がっている。

学校はいいとして、最も大切な一般客への毎日の解説が出来ていない。VIP等で特別に時間を割かないかぎり不可能である。

学芸員または学芸員補を増やさなければ実施できない。観客の興味を養うためにはどうしても直接の触れ合いが必要で、少しでも話が出来れば、何倍もの効果が果たせる。

今、私たちが手をこまねいておられるのは、夏期間だけのボランティア活動があるからである。比較的高年齢の方々が多いが、毎日十余人が村内で解説、案内、展示監視等に従事している。評判はすこぶるよい。

自己研鑽という意味

では、お互いに遠慮と甘さがある。有り体にいえば、若いボランティアも欲しい。施設でも足りないものがある。先の、雨天時の対応の場所や職人小屋、十分な講堂や展示室を含むビジターセンター。洒落た喫茶店、早くて美味しくて（これはなかなか難しいが）雰囲気のあるレストラン、村内の乗り物。

活動内容では恒常的な演説や解説、出版、ミュージアムグッズの開発等がある。

いずれにしても、お金と人手が必要なことばかりだ。しかし、もし、テーマパークを念頭に描いているならば、企業感覚で計画を見なおし、思い切った資本の投下が必要だろう。

学芸員という、金儲けには全く無知と思われる私でも、ハワイのポリネシアセンターやデイズニールランド成功の秘密はわかっている積もりだ。やがて十年を迎える開拓の

村を見て、くだいようだが、

本当によく育てたものだと思う。いずれにしても、利用者は増やさなければならぬ。一旦村に脚を踏み入れてさえもらえれば、いかような料理も出来るというものだから。が、さてどのようにして局面を開拓するか。

十年の節目は、よい機会と捉えよう。これも未知の分野だが、博物館評価がまたれる。

今までの実績の緻密な分析と評価の上で次の十年の計画を立てなければならぬ。できれば、もう一度、野外博物館とはなにかを整理し、北海道開拓の村の共通の概念を設定してもらいたい。その際、当初の概念に捉われる必要は全くないが、観客の要求を超えて未来を透徹する能力だけは堅持してもらいたい。

私が村に止まれる時間は極めて短い故に存在価値はない。しかし、二度と会うまいと思った子どもに会ったばかりに、未練がましい繰り言を申し述べてしまった。（北海道開拓の村学芸員参事 中村 齋）

北海道博物館略史(10)

三、活動の停滞と新しい動向―大正・昭和初期―

(1) 開道五十年記念北海道博覧会

明治末期から大正期にかけての北海道の博物館施設には大きな変化はなく、活動の停滞期といってよい。ただし、明治四十四年(一九一一)に皇太子の行啓を記念して釧路物産陳列場が釧路町の厳島神社境内に設置されたり(建設費、設備費は釧路郡漁業組合



北海道商品陳列所となった開道50年記念博覧会の工業館

が負担し、管理には町民があつた。陳列品は約四〇〇点、北海道庁の農事試験場や水産試験場に陳列館が設けられたりはしている。

このような中であつて、注目されるのが、大正七年(一九一八)の開道五十年記念北海道博覧会であり、この際に建てられた施設が、その後、北海道商品陳列所および同所附属の拓殖館として運営されるに至つたのである。

この博覧会は、「本道ニ於ケル拓地植民ノ経過及殖産興業、道路交通、並経済ノ状態ヲ普ク社会ニ紹介シ以テ将来益本道ノ発展ニ資スル」(同博覧会事務報告)ことを目的として大正七年八月一日から九月十九日までの五十日間にわたり開催された。会場は第一会場を札幌区中島公園、第二会場を同区北一条西四丁目、第三会場を小樽区に設けた。経費は約四六万円、観覧者は一四〇余万人にのぼつた。

出品は教育、衛生、農業、畜産、林業、水産、飲食品、鉱業、工業、参考品の九部に分類され、出品総数は四万四、三三五点、出品人員は二万一、八二六人に達した。

この博覧会のために建てられた施設は、終了後にこわされたが、第一会場の拓殖教育衛生館(木造モルタル塗二階建、建坪二五三・〇五坪、二万八、七六五円)は「将来拓殖記念館トシテ存置シ本道拓地植民ノ事業ニ関スル一切ノ資料ヲ蒐集シ展覧セシムル目的ノ下ニ建設」(前掲事務報告)され、第二会場の工業館(本造モルタル塗二階建、建坪二〇一・二五坪、三万一、四七八円)は北海道物産陳列場として利用することを想定して建てられた。

既に前回および前々回にふれたとおり、北海道物産陳列場は第一会場となつた中島公園の中にあつたが、当時、このあたりは冬になると交通が不便なため、毎年四月十五日から十一月十五日までに限つて開館していた。そこで、こ

の博覧会の開催を契機として、市内の便利な場所に移転し、通年開館とすることを計画したのであつた。第二会場の工業館が建てられた北一条西四丁目の敷地は、停車場通りに面し、元区立女子尋常高等小學校の跡地で、札幌区から道庁に無償で寄附されたものである。

同所は本道産業の発達を図ることを目的として、商工業の調査、内外参考品の陳列展示、本道物産の試売、本道物産の売買仲介、図案の研究調査などの事業を行った。観覧人員および委託販売高は、大正九年が六万八、九九〇人、正九年が六万八、九九〇人、二月、十年が二二万六、三一九人、四万四四三三円(但し八月に全国商品陳列所大会開催)である。

大正十一年七月、皇太子がこの陳列所を視察されたが、当時は(一)大会社・工場等の製品、(二)道内の農産・水産・加工品、(三)委託販売品の三種に大別して陳列していた。

この陳列所は道庁産業部(大正十五年に内務部)商工課の所管であつたが、昭和三年に札幌商工会議所に移管され、道庁から補助金を交付するとともに、建物、敷地を無償貸付することになつた。

〔主な参考文献〕

- 「開道五十年記念北海道博覧会事務報告」(大正八年)
- 「釧路物産陳列場要覧」(明治四十四年)
- 「北海道農事試験場第二陳列館物品解説」(昭和二年)
- 「北海道商品陳列所報」(行啓記念「創刊号」(大正十一年))
- 「長官事務引継書」(昭和六年)

(北海道開拓記念館 学芸部長 関 秀志)

館園紹介

有島記念館

有島記念館は、昭和五十三年、有島武郎生誕百年を記念して開館しました。

有島武郎は「カインの末裔」や「生れ出づる悩み」などで知られる、大正時代を代表する作家ですが、ニセコ町（当時「狩太村」）に所有していた農場を、小作人に無償で解放するという偉業を成し遂げた人でもありました。

明治十一年、東京に生まれた武郎は、海外留学を挟み前後十二年間を北海道で過ごしました。その間、武郎の父武は、北海道に農場を経営することを計画し、明治三十三年からニセコ町にて開墾が始められます。これが後に有島武郎名義とされ、有島農場となりました。

大正五年、武郎は妻安子、父武をあいっいで亡くします。その頃から彼の文筆活動は本格化し、翌大正六年、ニセコ町を舞台とした短篇小説「カインの末裔」その他を発

表、作家としての名声を得ます。その後、岩内出身の画家木田金次郎をモデルとした

「生れ出づる悩み」や「或る女」等「惜しみなく愛は奪う」等を発表、作家としての地位を不動のものとしたのでした。

ところで、彼の晩年の作品「親子」では、農場所有をめぐる対立する父と子が描かれていますが、この問題は武郎自身の問題でもありません。一時熱烈なキリスト教徒であり、社会主義にも傾倒した武郎は、自らが農場を所有し、



多くの小作人を使用している現実に矛盾を感じ、ついには大正十一年、有島農場百三十

二万坪を、小作人に土地共有の形で無償で解放したのです。その翌年、武郎は婦人記者

波多野秋子と軽井沢にて情死してしまいましたが、解放された農場では狩太共生農団が設立され、武郎の土地共有の理想に従った経営が行なわれ

ました。昭和二十三年、戦後の農地改革にもともない共生農団が解散されると、団員たちは有島謝恩会を結成し、武郎の理想を後世に伝えるべく農団事務所の一部を有島記念館とし、その維持管理にあたりました。

現在の記念館はそれから数えて三代目、ニセコ町により農場事務所跡近くに建てられました。

当館は、有島謝恩会から寄託された資料をもとに、有島家ゆかりの人々や研究者からの寄贈資料を加え、約千七百点の収蔵資料を持ちます。館内には、有島農場の写真、帳簿類、武郎直筆の農場解放記念碑案文の原稿などを展示し、有島農場の解放にいたる軌跡を解説します。また、武郎と

その関連する人々の写真、書簡、書、絵画、初版本などで彼の生涯と文学を紹介しています。そのほか有島と農場解放を十五分にまとめたスライドや、有島文学を紹介するビデオもご覧いただけます。

また、周囲の有島記念公園



は、武郎の名作を象徴した造形を施し、羊蹄山とニセコアヌブリのふたつの秀峰を見渡しながら、武郎の文学世界の散策が楽しめます。記念館の近くには、武郎が小作人を集めて解放を宣言した弥照（いやてる）神社や、大正十三年に建てられた農場解放記念碑が当時のまま残されており、

毎年多くの観光客や文学ファンでにぎわっています。
（有島記念館案内）

★所在地

虻田郡ニセコ町字有島五十七番地

★開館時間

午前九時から午後五時まで
★休館日
毎週月曜日と年末年始

★入館料

大人 一人 三〇〇円
団体 一人 二〇〇円
（十人以上）

★交通

中学生以下無料
JRニセコ駅から徒歩三十分

道南バス有島記念館前下車
徒歩五分

★問い合わせ先

有島記念館（〇一三六―四四―三三四五）

ニセコ町教育委員会社会教育係（〇一三六―四四―二一〇一）

（有島記念館

学芸員・山崎英文）

館 園 紹 介

おびひろ動物園

おびひろ動物園は、昭和三十八年七月十三日、札幌市円山動物園について道内二番目の動物園として誕生しました。動物とのふれあいを通して豊かな情操を養う文化施設として、道東における遊園地を併設した唯一のレクリエーション施設として、十勝はもとより道東全域の人々に利用されてきました。

開設して一年後より、寒冷地で熱帯系の野生動物を冬季間、健康に飼育するために実験を始めた「耐寒訓練」は予想以上の成果を上げ、今では「耐寒飼育法」として北海道内の四動物園で取り入れられ、キリン、ゾウ、シマウマなどの熱帯系の動物が雪の中で日光浴を楽しんでいる姿が見られます。

また、世界で初めてアイススケートを覚え、帯広市で初めて開催された全日本学生氷上選手権大会の晴れの舞台でその勇姿を披露した人気者の

「ターボ」、インドゾウやカリフォルニアアシカのショーなども人気を拍したものでした。

さらに、動物園は国際親善にも大きく寄与してきました。昭和四十一年には旧ソ連邦よりホッキョクグマが贈られ、四十八年には国際姉妹都市である米国アラスカ州スワード市よりヘラジカ、六十年には中国黒竜江省と北海道との親善の一環として北海道に対しシベリアヘラジカが贈られ、おびひろ動物園がこれをお預かりし、二年後には二世が誕生、六年後には三世が誕生するなど道東の子供達を喜ばせてきました。

しかし、類似施設の増加や各地で行われるイベントなどと競合し、動物園が道東における唯一のレクリエーションの場であった時代は終わり、年々利用者の数が減少しつつあるのが現状です。動物園は幼児から老人まで幅広い年齢層の人々に利用される施設であり、いわゆる生涯学習施設の代表的な施設といえます。

二十一世紀を目前にして、地球環境の問題が地球規模で論じられています。そして、動物園は地球環境に関するいろいろな情報を提供し、自然環境保護の学習の場として活用される施設として、また二十一世紀の動物園は地球上の野生生物の種(遺伝子)の保存の場であり、調査・研究の場として、動物園で飼育する野生動物の保護・増殖や地域に生息する野生生物の生態の研究ができる施設としての役割が求められることでしょう。

おびひろ動物園は、開設以来二十年を迎え、動物舎など各施設が老朽化し、再整備を

せまられています。再整備にあたっては、今までのような珍しい動物を飼育展示し、見るだけの動物園ではなく、こうした時代の要請に応えられる生涯学習の一施設として再生したいと考えています。



〈おびひろ動物園案内〉

★休園日

金曜日(祝祭日・夏休み期間中を除く)

★入園料

小中生 一〇〇円
高校生 三〇〇円
大人 四五〇円

(団体割引)

三十人以上 二割引

★遊具使用料

一〇〇円 豆汽車、ゴーカート、メリーゴーランド他
二〇〇円 空中観覧車他

★交通

JR帯広駅よりJRバスで自衛隊前行きまたは畜大農場前行き、動物園前下車徒歩一分。またはタクシーで約十分。

★駐車場(無料)

★問い合わせ先

おびひろ動物園
〒〇八〇
帯広市字緑ヶ丘二番地
☎〇一五五

二四―二四三七

(おびひろ動物園)

園長 中村 悟

★開園時間
四月から九月
午前九時から午後四時三十分まで(入園は四時まで)
十月から十一月
午前九時三十分から午後四時まで(入園は三時三十分)



館 園 紹 介

下川町ふるさと交流館

下川町ふるさと交流館は郷土資料を通して、ふるさと下川の理解を深めるとともに、都市と山村の交流、イベントや広域観光ルート等に対応する中核施設として平成三年七月二十三日に開館しました。下川町は上川の北部、名寄市の東にある農業・林業・鉱業とともに発展した町です。

当館は市街地の南側丘陵上、桜ヶ丘公園内にあり、ここにはふるさと運動の一環として、昭和五十六年より町内外の人々が自ら石を積み上げ築城している「下川万里の長城」と冬期間土の上で各種スポーツやレクリエーションが楽しめる土間運動場「桜ヶ丘アリーナ」があります。

建物は著名な建築家毛綱毅曠氏の設計により、東洋的・未来的なデザインで展望台と資料館からなっています。

展望台はまた地中から鉱石が精練されていく様子を岩・鉛板で表しています。中に入

ると一階は五角形で作られた十二面体の部屋があり、ラセン階段を上がり展望台に登ると、そこからは下川の市街、南の丘陵地帯が一望できます。また展望台の周囲には池を巡らし、前方には雲のモニュメントがあります。

資料館は鉄筋コンクリート平屋建てで、正面の壁は下にガラスが入り、室内からも池の美しさを楽しんでいただける設計になっています。

館内は展示ホール、展示室、会議室、休憩用のホール、事務室があります。



展示は「北に輝く北斗七星のもとで、人は多くの英知を

もっていかにか開拓を押し進めたか」また「自然との共生をいかにしてもとめたか」をテーマとして郷土資料を七つのコーナーに分けて展示しています。

展示ホールでは、①「すべてを育む日の恵み」として、下川の自然について、地形模写図、下川各地の写真、町内より出土した化石、町内に生息する動物の剥製また動植物の写真で解説しています。また中央には下川特産品のカラマツ木炭を使用した炭の川があり、展示室入口には下川出身力士「安念山」、「凌駕」の化粧回しを展示しています。

②「心をささえた月の光」では、衣食住について開拓から今日までの生活、商業資料を展示しています。

③「火の恩恵と生活」では、生活や産業での火に関わる資料を展示しています。

④「天から贈られる水」では、水と人との関わりについて消防道具、炊事道具などを展示しています。

⑤「木のぬくもりと暮らし」

では、造材道具、大工道具など木に関する資料で下川の基本産業である林業について展示しています。

⑥「山から掘られた金や銅」では、以前操業していたサンル金山、新下川銅山に関する資料が展示してあります。

⑦「豊かな土からの実り」では、人々と土との関わりについて、農機具などを展示しています。



またスライドによって下川の四季も紹介しており、休憩用ロビーでは、下川の自然、歴史についての紹介ビデオが見学できます。

当館の活動としては、より

詳しく歴史・自然を解説するために年二回の企画展、新たに町民から寄贈された資料を展示する収蔵資料展を年一回、また各種郷土学習会・講座を行ってまいります。

（下川町ふるさと交流館案内）

★開館時間

午前九時から午後五時まで

★休館日

月曜日（祝祭日は翌日）、年末年始（十二月三十日から一月十日）

★入館料

小中学生一〇〇円（八〇円）
大人 二〇〇円（一六〇円）
*カッコ内は二十人以上の団体料金

★交通案内

JR名寄駅下車、紋別行バスで末武商店前下車徒歩二十分、あるいは、町営バス下川町役場発班溪線で桜ヶ丘公園下車徒歩五分

★お問い合わせ先

〒〇九八—一二 上川郡下川町西町一〇四六番地

☎〇一六五五—四二六二七
（下川町ふるさと交流館）

学芸員 今井真司

◆平成五年度北海道博物館

大会の開催日程

第32回北海道博物館大会は、滝川市において開催が決まりました。テーマ等についてのご意見がございましたら早めに事務局までご連絡をお願いいたします。開催日程は次のとおりです。

期日―平成5年7月7日(水)

8日(木)

会場―滝川ホテル三浦華園

◆平成五年度全国博物館

大会の開催日程

第41回全国博物館大会については、すでにご案内していますが、北海道で開催されますのでより多くの皆様に参加していただきますようご案内いたします。

期日―平成5年10月20日(水)

21日(木)

会場―札幌市教育文化会館

寄 贈 図 書

◆帯広百年記念館紀要、第10号(平成4・3)

◆名寄市郷土博物館報告、第7集(平成4・3)

◆根室市博物館開設準備室紀要、第6集(平成4・3)

◆市立函館博物館研究紀要、第2号(平成4・3)

◆小樽市博物館紀要、第6号、(自然史系、第1号)(平成4・1)

◆苫小牧市博物館研究報告、第2号(平成4・3)

◆苫小牧市博物館所蔵資料目録6、昆虫類所蔵資料目録蝶類篇(平成4・3)

◆北海道教育委員会、生涯学習関連報告集録(平成4・3)

◆札幌市豊平川さけ科学館、館報、第3・4合併号(平成4・3)

◆上士幌町ひがし大雪博物館研究報告、第14号(平成4・3)

◆美幌農業館・博物館館報(平成4・3)

◆美幌博物館収蔵目録、第2集(平成4・3)

◆利尻町立博物館年報、第11集(平成4・3)

集(平成4・3)

◆知内町郷土資料館報告、第8号(平成4・7)

◆市立函館博物館、函館市制施行70周年記念誌特別展、描かれた箱館・五稜郭(平成4・6)

◆美幌農業館・美幌博物館、第5回特別展、近代史の美幌(平成4・9)

◆東京都博物館協議会会報、No.67(平成4・10)

新 入 会 員

(団体会員)

真狩村羊蹄ふるさと館(真狩村字社296番地1)

江差追分会館(江差町字中歌街193番地)

(維持会員)
株式会社コダックシグマ札幌(札幌市中央区南3条西8丁目太陽ビルB1)

事 務 局 日 誌

11・19 博物館活動交流

推進会議(道央ブロック学芸員等会議、滝川市・伝習館、三野事務局員出席)。

11・25 博物館活動交流
推進会議(道東ブロック学芸員等会議、網走市・網走市サイクリングターミナル、右代事務局長出席)。
1・24 学芸員職員部会と事務局打合。
2・3 「道博協ニュース」第40号発送。釧路沖地震被害・国際先住民年について
宛に送付。
2・5 「学芸職員部会ニュース」No.39收受。

◆会費納入のお願い

本協会の円滑な運営のため、平成4年度の会費納入を左記によりお願いいたします。

(会費)

団体会員 一五、〇〇〇円
個人会員 三、〇〇〇円

(取扱銀行)

北海道拓殖銀行
新さっぽろ支店
普通口座
一八六一二八七〇〇〇

(郵便振替)

小樽 七―二九四一九

◆事務局からのお知らせ

◆釧路沖地震被害・国際先住民年の調査票の回答状況
現在、多数の館園よりこの回答をいただいておりますが、未回答のところは整理の都合上、多少遅れても回答をお願いします。この2件の調査について、近く整理をし資料の配布を予定しています。

また、学校5日制にともなう館園の対応について、調査させていただく計画もありますので、協力のほどをお願いいたします。

事務局までお問い合わせください。

「道博協ニュース」の原稿を募集しています。各館園の動向、トピックス、新着資料や展示紹介、各会員のご意見を寄せください。

字数等の詳細については、事務局までお問い合わせください。